

## 論文

# 明治期における政商型貿易人（Ⅰ）

中 川 清

## 目 次

はじめに

1. 生い立ち
2. 戊辰戦争の頃
3. 明治初期の貿易商社
4. 洋 行
5. 西南戦争前後
6. 明治10年代の貿易商社
7. 兵器商社と日清戦争
8. 台湾進出
9. 新規事業の展開
10. 武器商人のイメージ
11. 権力者とのつながり

## はじめに

明治41年に刊行された『日本金権史』の「政商論」の一節に、山路愛山は「政商とは支那の字書にも無く、日本の節用集にも無き名なり。無きは当然なり。是れは明治の初期に其時代が作りたる特別の時世に出来たる、特別の階級」であると定義している（日本経営史研究所の昭和53年刊行復刻版による）。もう少し厳密に言えば、政府から特権的保護を与えられ、あるいは政府との特権的に有利な取引を継続し蓄財していった商人を、「政商」と規定することが出来るだろう。

明治新政府成立直後に登場した政商の代表的存在として山城屋和助が知られている。長州出身の山城屋和助が、野村三千三を名乗っていた頃、ともに奇兵隊士であった山県有朋と親交があった。山城屋が兵部省御用達となったのは、陸軍大輔山県有朋との緊密な関係によるものである。パリ滞在中の派手な遊興によって山城屋和助の名は知られていたが、陸軍省の公金を流用して投機資金に充当していた生糸相場に失敗したため、明治5年11月陸軍省の応接室で和助は割腹自殺を遂げているが、山県に累が及ぶのを恐れたためである。明治のジャーナリスト宮武外骨は、『明治奇聞』に山城屋和助が「こんなヘマをやらなかったら、あるいは、三菱、大倉以上の大富豪になりすまし、今頃は男爵になっていたろうに」と書いている。まさに貴重な反面教師であったと言えるだろう。

明治以降の日本が近代国家への道をつき進み、性急に産業革命を達成していった過程においては、政商の誕生もいわば必要悪であったかも知れない。ここにとりあげる大倉喜八郎、益田孝及び高田慎蔵の3人は、いずれも多分に「政商」と目される側面をもった先駆的な貿易商である。そして、明治末期にあって陸軍省の指導によって結成された兵器輸出シンジケート「泰平組合」において、三井、大倉、高田の有力兵器商社が見事に結集している。

以下の稿では、これら3人の政商型貿易人に見られる共通点を追いながら、明治期以降のわが国商社史の一つの側面を摘出することにしたい。

## 1. 生い立ち

ここに取り上げる3人の政商型貿易人のなかでは、大倉喜八郎が最年長者である。彼は1837年（天保8年）越後国新発田で生まれているが、現在の新潟県新発田市である。生家は累代の大地主であり、名字帯刀を許されていた富裕な家柄であったと言われている。

次いで、1848年（嘉永元年）に益田孝が佐渡の相川で誕生しているが、父親は佐渡の地役人である。そして、更に4年後の1852年（嘉永5年）、同じ相川に生まれたのが高田慎蔵である。慎蔵の実家である天野家及び、彼を養子に迎えた高田家ともに佐渡奉行所に出仕していた。両家はいずれも、4代にわたって佐渡の地役人であった益田家とは知己の間柄であったと思われるが、益田孝が7歳の時に父親が箱館奉行支配調役下役として北海道に勤務替えとなったため、幼年期の益田と高田が相識り合うことはなかっただろう。

大倉喜八郎と益田孝の年齢差は11歳、そして益田と高田慎蔵は4歳違いであるが、3人とも新潟県に生まれている。以下の稿において再三にわたって引用することになる長井実編『自叙益田孝翁伝』（中公文庫）に「私（益田孝）はもし三井をやらねば、大倉と一緒に（会社を）やっておったであろう。大倉はよく一緒にやってくれと言うておった」とある（括弧内は引用者）。益田と大倉の間にはいわば同郷者ともいうべき親しさがあったが、同時代の高田慎蔵に対してもある種の同郷者意識が働いていたと思われる。

大倉喜八郎に関しては、小説化された作品を含めて数多くの伝記あるいは評伝が刊行されており、虚実とりまぜた数々のエピソードが伝えられている。なかでも、彼の業績を頌徳する鶴友会編『大倉鶴翁伝』（大正13年）及び、同会編『鶴翁余影』（昭和4年）が「正伝」として知られているが、後者は喜八郎が92歳で没した翌年に刊行された追悼文集である。

益田孝に関しては、前出の『自叙益田孝翁伝』が、唯一のまとまった刊行本であるが、明治以降の日本貿易史あるいは経済史に関する記述に彼の名を目にすることは多い。

高田慎蔵については、『実業之日本』第5巻第1号（明治35年1月1日号）

から9回にわたって「高田慎蔵氏経歴談」が連載されている。明治35年に至る迄の慎蔵の経歴については、この座談記事が大いに参考になるが、以下の本稿で引用の際には、『経歴談』と略記した。更に、かつての高田商会常務志保井重要が記述した『高田紹介開祖高田慎蔵翁並多美子夫人』が、昭和25年12月に私家版として刊行されているが、戦後の名残り示す粗末な活字と用紙によって作られた本文70頁ほどの小冊子である。

一方、澁澤栄一を筆頭に、当時の有力実業家92名を網羅した瀬川光行編著『商海英傑傳』が明治26年に出版されたが、日本経営史研究所によって昭和53年に復刻刊行されている。同書には、大倉喜八郎及び高田慎蔵に関する項があり、それぞれ10-12頁にわたって記述されているが、益田孝はとりあげられていない。

## 2. 戊辰戦争の頃

17歳で江戸に出た大倉喜八郎は、鯉節屋に住み込み奉公ののち、4年後の安政4年（1857）乾物店を開業し、大倉屋を稱した。慶応元年（1865）には鉄砲商に奉公したのち、大倉屋鉄砲店を開業している。

幕末の戦乱に際しては、官軍に銃器を供給していたため上野の彰義隊本営に喚問されたものの危うく難を逃れた経緯が、喜八郎の豪胆振りを示すエピソードとして伝えられている。彼の「正伝」である『大倉鶴翁傳』にも取り上げられている挿話であるが、明治26年に刊行された前出の『商海英傑傳』には、次のような記述がある。奥州の役に際して、「自ら弾薬鉄砲を携へて南部に赴き之を官軍に売らんとす。官軍怪しみ捕へて之を鞠す。君笑て曰く余は商売なり、官賊の分我関する所にあらず。利あらば之を賊軍にも売るべく利なければ之を官軍にも與へざるべしと。將士皆其豪胆に服し悉く其商品を購ひ、更に輜重の事務を命ず」。

喜八郎を詰問した相手が、彰義隊ではなく、東北征討の官軍へと全く正反對の転換である。こうした挿話にどれほどの信憑性があるのかは別として、幕末戦乱期にあって大倉喜八郎は、いささか冒険的な武器商人であったと言

えるだろう。そしてまた、喜八郎にとっては、明治新政府軍に接近する絶好の機会であったことには間違いないだろう。

一方、箱館時代の益田孝は、早くから英語の初歩を習っていたが、安政6年、父鷹之助が江戸詰となり、万延元年には外国奉行支配役についている。文久元年に14歳で元服した益田孝も外国方通弁御用に召し出され、米国公使館があった麻布善福寺の宿舎詰となった。文久3年（1863）には、池田筑後守の訪欧に際して、益田孝も従者として参加しているが、これについては後述する。

帰国後の益田は、フランス軍将校の指導のもとに騎兵将校養成訓練を受けているが、慶応4年には騎兵頭を拝命している。幕府軍の崩壊に際して、益田孝は全く抵抗することもなく武士を捨て、早々に横浜に出ている。明治3年には、「亜米一」（アメリカ一番館）と称されていたウオルシュ・ホール商会に勤務している。この外国商館勤務によって貿易実務に触れることになるが、幕末から明治初期の時代において、益田孝ほど様々な外国人に接する機会が多かった日本人は珍しいだろう。

慶応元年（1865）、14歳になった高田慎蔵は佐藤奉行所の管轄下にあった運上所に仕出し、下調所通弁見習となっている。彼自身の回顧談によれば、この時に「初めてエー、ビー、シーを習ひました」。

佐藤奉行所の本来の業務は、金山の管理であるが、幕末を迎えたその頃、佐藤奉行所に新たな仕事に加わることになった。新潟あるいは、日本海沿岸のその他の一港の開港が、安政五国条約によって定められたからである。結局、幕府側の要求もあって、1868年4月をもって新潟港を貿易港とし、佐渡の夷港（現在の両津港）を避難港として開港することが取決められた。

その頃、英国公使ハリー・パークス卿は、新潟及び佐渡を訪れている。アーネスト・サトウ『一外交官の見た明治維新』（坂田精一訳、岩波文庫）によれば、慶応3年（1867）7月、パークス公使、アーネスト・サトウ書記官などの一行を乗せた英国軍艦バジリスク号は函館を出発して、新潟及び佐渡に向かっている。目的は、新たに開港が予定されている新潟の貿易港と、避難

港である夷港の事前調査である。

佐渡奉行を訪れたパークス公使の一行は、「すぐに胸襟を開いて語り、大いに酒をくみ合った」とA・サトウは記している。この時、接待役の一員として、高田慎蔵も供応の宴に列席していたというエピソードが『商海英傑傳』の高田慎蔵の項に記されている。この時、ビールの栓を抜こうとした慎蔵は、初めての経験のため要領がわからず、同行のイギリス人アトソンの頭上にビールの泡をこぼしてしまったというエピソードを同書は伝えている（前出の『高田商会開祖高田慎蔵並多美子夫人』では、ビールがシャンパンに変わっており、泡をこぼした相手もパークス公使の「衣服」になっている）。

戊辰戦争に際して奥羽同盟が結成された時、佐渡奉行所の地役人のなかにも幕府軍に参じようという動きがあった。しかしながら、これに同意する者は僅か40人に過ぎなかったが、高田慎蔵もこれに加わっていた。結局、幕軍に「勝算なきと、又佐渡に患ひを遺さんことを慮り（中略）恭順の意を表する事となった」と、『商海英傑傳』は記している。

明治新政府の成立とともに佐渡県民政庁が設立されたが、慎蔵も新しい役所に出仕することになった。このまま佐渡にいれば、英語を満身に習得出来ないと考えた慎蔵は、英学修行のため上京することを佐渡県知事に申し入れていたが、仲々許可されなかった。結局のところ、修学のために必要な手当ては支給されないが、1年間の給料と扶持金が前払いされることになって42両ほどの金子<sup>きんす</sup>を手にした慎蔵は、上京することになった。

ところで、明治政府成立後の佐渡には、佐渡奉行所に代わって鉱山司が設置されており、工部省直轄となっていた。明治3年9月、鉱山正兼民部権大亟井上勝が佐渡金山を視察しているが、この時、高田慎蔵は井上勝の面識を得たと、『経歴談』で語っている。更に、英国人技師エラスマス・H・ガワーが金山の採鉱及び冶金技術の指導のために、井上らの一行とともに佐渡に来ている。

ガワーは、鉱山及び地質調査のため日本各地を旅行していたが、佐渡に渡って来る前のガワーは、北海道の岩内（いわない）に滞在していたようである。

パークス公使とともに新潟及び佐渡を旅行したA・サトウは、その時、北海道に立寄っているが、「この（岩内）炭鉱は最近私の友人エラスマス・ガウアーのもとに作業が開始されていた」と『一外交官が見た明治維新』に記している。

日本各地の調査旅行の合間をみて東京に帰って来た時のガワーは、日本人女性志保井うたと暮らしていた。二人の間に生まれたのが、のちに高田商会常務となる志保井重要氏である。『高田商会開祖高田慎蔵並 多美子夫人』が同氏によって書き残されたことは既に触れている。更に、ガワーのお孫さんにあたる志保井利夫氏は、「エラスマス・H・ガワーの生涯とその業績」を書いておられる（『北見大学論集』第1号及び2号。1978—79年）。

上京にあたって慎蔵は、このガワーに3通の添書を書いてもらっている。そしてこの時、ガワーが紹介状（添書）を書いてくれた相手の一人が、マルティン・ベアであった。慎蔵自身の語るところによれば、「築地のホテルに居りました獨逸の名誉領事エム・エム・プアといふ人」である。

### 3. 明治初期の貿易商社

上京した高田慎蔵は、ドイツ人ベアによって、築地の外国人居留地第40番にあった独逸商館H・アーレンス商会を紹介された。英学修行のため慎蔵がこの働くことになったのは、明治3年（1870）12月である。東京の「開市」が実施され、築地に外国人居留地が開設されたのは、その前年（明治2年）1月1日である。

英米企業に比べると、ドイツ系企業の我国への進出は数の上では劣っていた。外国との通商が認められた安政6年（1859）当時の長崎には、ドイツ商社6社が商館を設置していたが、やがて10社を数えるようになった。そして、横浜が開港されると、外国商館は横浜に集中するようになった。慶応2年（1865年）1月の横浜には、46社に及ぶ外国商館が進出していたが、そのうちの12社がドイツ商館である。更に時代が下って明治31年（1898）当時の我国におけるドイツ商社の総数は、横浜に20社、神戸22社となっていた。

A・サトウによれば、幕末横浜居留地に支店を設置していた外国企業は、「イギリスの一流商社たるアスピナル・コーンス会社、マックファーソン・マーシャル会社、アメリカ屈指のウォルシュ・ホール会社などであった。ドイツ、フランス、オランダなどの商社は、『物の数に入らぬ』と思われていた」。そして、「イギリスの某外交官が当時の横浜在住の外国人社会を『ヨーロッパの掃溜<sup>はきだめ</sup>』と称した」状況であった（『一外交官の見た明治維新』）。

前述のように、益田孝は明治3年ウォルシュ・ホール商会に入社しているが、ここで同僚となったドイツ人ベアについて、『自叙益田孝翁伝』には次のように記されている。

「ウォルシュ・ホールはベアという店員を海外に派遣して、ラングンやサイゴン米を輸入した（中略）。

ベヤはドイツ人で、なかなかのやり手であった。この翌年（明治4年—引用者）独立して、鉄砲か何かの商売を始めた。これが後に高田商会になった。高田慎蔵はベヤの番頭をしておったのである」（傍点は引用者。ここでは、「ベア」を「ベヤ」と表記されている）。

ベアについて、宮島久雄「マルチン・ベアについて—明治初期—在留外国人商人の足跡」（京都工芸繊維大学工芸学部研究報告『人文』第35号—昭和61年）がある。そしてこの研究では、ベアの来日時期を明治3年3月あるいは4月頃と推定されている。

ところで、上京した高田慎蔵は、明治3年の12月にはベアに会っており、更に益田孝の回想によれば、同じ年（明治3年）に益田がウォルシュ・ホール商会に入社した時、ベアは既に同商会で働いていた。また、前述のようにイギリス人技師ガワラの友人あるいは知人であったことから考えても、ベアの来日は明治3年よりも早い時期であっただろう。

慎蔵がH・アーレンス商会で働くようになった頃の築地居留地には、折角の「開市」にかかわらず東京に店を構える外国商館はまだ少なかった。既に横浜が、貿易港として一歩先を進んでいたからである。しかしながら、東京に本拠を置いていたアーレンス商会は、明治新政府特に軍関係の商売をすす



めてゆくのは地の利を得ていた。慎蔵自身の『経歴談』によれば、「（軍服用の）羅紗地、小銃、靴舄（など）を輸入し」、「私（慎蔵—引用者）が<sup>それ</sup>夫を陸軍へ売りに行」っていた。

まだ年若い慎蔵では、大蔵省あるいは兵部省（明治5年2月に陸軍省と海軍省に分割）への売込みに際して、満足に相手にしてもらえなかった場合が少なくなかった。そんな時の慎蔵は、長州人の山城屋和助に商品を納め、和助を経由して兵部省に納入することが少なくなかったという。また、アーレンス商会が兵部省（あるいは陸軍省）に直接納入するよりも、山城屋和助経由したほうが高く売れたと、慎蔵は『経歴談』で語っている。のちに陸海軍の「政商」といわれるようになった高田慎蔵は、若い頃にかかわりあいを持った山城屋和助の悲劇を、いわば反面教師としていつまでも記憶していただろう。

明治5年（1872）3月、慎蔵は、相川県（佐渡）知事より夷（えびす）港繫船場税関調役等外四等出仕を命じられている。そして、向う1年間東京に滞在して英学修行を続けることが認められるとともに、月額6円の手当てが支給されることになった。しかしながら慎蔵は、相川県の官員であることを辞してアーレンス商会の業務に専念することを決めている。

翌6年には、アーレンス商会から月額20円を支給されるようになっているが、同じ7年には、タミ（多美子夫人）と結婚している。

佐渡時代の高田慎蔵が、工部省民部権大丞の職にあった井上勝の知己を得ていたことについては前述のとおりであるが、この頃の慎蔵は井上に勧められて工部省に出仕することを考えていた。しかしながら、ベアの説得もあってアーレンス商会にとどまることを決心し、本格的に貿易人の道をすすむことにした。

ところで幕末の頃、のちの伊藤博文、井上馨ら長州出身の5人の若者が留学のため英国へ密航しているが、その時の一人が井上勝である（当時の名前は野村弥吉）。井上勝はロンドン大学で地質学を学んでいるが、この時に土木技術の知識を身につけている。のちに鉄道局長官となり「鉄道の父」とい

われるようになった井上勝子爵は、高田慎蔵にとって重要な官界人脈の一人であっただろう。

H・アーレンス商会時代の慎蔵が取扱っていた商品は、陸軍省納入の兵器あるいは軍用資材ではなかった。ドイツから輸入していた医学書も売れ行きが良好であったと、慎蔵は『経歴談』で語っている。

『実業之日本』明治30年5月1日号の「新撰近世逸話」欄は、当時の実業家のエピソードを伝える連載の雑報欄である。そして若い頃の慎蔵について、「高田慎蔵のベア商店にあるや、古画骨董の利あると察し頻りに手を広げて之を買収す」と伝えている。明治も間もない頃、価格が下落していた古い日本画や蒔絵を買集めてフランスに送っていたというのである。ところがこれらの古美術品がフランスに到着した頃、現地でも値下がりしていたため止むなく日本に積み戻したところ、逆に日本国内では値上がりしており思わぬ利益を得たというのである。後年の慎蔵は、その頃の実業家の例にもれず古美術の蒐集家として知られていたが、アーレンス商会時代にあっては古美術の売買も手がけていたようである。

とはいえ、兵器及びそれに関連した機械及び資材の納入が、H・アーレンス商会の業務の主流であったことは既に記した通りである。明治6年(1873)には造兵司(のちの東京砲兵工廠)工場の建設に関する仕事を請け負っている。更に、同じ年の1月には、アーレンス商会を経由して海軍が発注していたアームストロング砲六門のうち四門が横浜に到着しており、3月にはクラブ砲も到着している。高田商会はのちにアームストロング社及びクラブ社の日本総代理店となるのだが、慎蔵はアーレンス商会及び、次に述べるベア商会時代を通じて、武器商人としての知識と経験を蓄積していった。

3人のなかで実業家として最も早く出発した大倉喜八郎は、戊辰戦争後の「遺物を買収せしめ瞬間にして巨利を博」している。更に、「欧米の文物駸々として我邦に輸入するを見て直(ただち)に洋服裁縫店を本町に開き特に外人を聘して職工を管理せしめ(中略)我邦洋服店の開祖とす」。また、「貿易事業の益々盛なるべきを察し石造の巨屋を横浜に建築し海外貿易品取扱所

に充つ。本邦石造の家屋は実に此時より始まる」と、『商海英傑傳』は記している。

一方、益田孝はウォルシュ・ホール商会に1年間勤めたのち、明治5年には大蔵大輔の井上馨の知己を得て大蔵省四等出仕に任じられている。井上馨は、のちに「三井の番頭さん」と揶揄されるように、政界にありながらも三井財閥の顧問役と目されていたが、益田との関係はこの時に始まっている。

『自叙益田孝翁伝』には、「井上さんの考えでは、益田は横浜で外国人を相手にして居ったのだから外国人の呼吸もわかって居」たと、やがて間もなく造幣権頭に抜擢された理由を説明している。

ところで、明治6年（1873）5月に井上馨は大蔵大輔を辞任しているが、益田もまた辞表を提出している。その年の末に井上が先収会社を設立するとともに、益田は同社の副社長に就任している。この会社は、米、生糸、茶の輸出及び、武器、羅紗、肥料、古銅などの輸入とともに、地租改正によって商品化された米の流通にも参加していた。また、武器輸入ではシュナイダー銃10万挺を陸軍に納入しているが、兵器商人としての益田の面目がうかがわれる。

明治8年（1875）末、井上馨が官界に復帰するに当って、先収会社は解散しているが、「先収会社は儲かっていた。井上さんに出してもらった金を返してまだ大分に残って、みなに分配した。私は六千円もらった」と、益田は、『自叙益田孝翁伝』で語っている。

その頃、大元方として三井の大番頭を務めていた三野村利左衛門は、政府の仕事を受命する商社の設立を考えていた。こうして、かつての大蔵卿大隈重信及び井上馨の口利きもあって、明治9年に益田孝を社長に三井物産が設立された。

会社設立に当っては、「私（益田孝—引用者注）が責任を負うたのである。もしやり損ねても三井は免れることになっていた。三井家からは、資本金は与えられない。ただ三井銀行に五万円の過振（かぶり）を許すということであった。無資本金会社であった。コミッション・ビジネスをやるのだから資

本金はいらぬわけである」。

そして、「先取会社の商売中、将来有望なものは三井物産会社に引継ぐことにし」た。「先取会社は陸軍のご用をして、ブランケットだの羅紗だのをイギリスから輸入して陸軍へ納めておった。木綿物は大倉が納めておった。これがいわば特権であった。物産会社はこの先取会社の特権によって陸軍へブランケットだの羅紗だのを納めた」と、『自叙益田孝翁伝』で語っている。ここで興味深いのは、陸軍へ木綿物を納入していた大倉組の「特権」を認めており、既に両社間で軍用物資納入の「棲み分け」がみられていたことである。更に幕府によって「三井は国産方というものやっておった」が、「伊豆八島の産物の売り捌き」であり、益田によれば「くさやの干物だの何だのろくなものはなかったが」、「この国産方の仕事を物産会社へ引受け」ている。しかしながら、「三井物産会社は全く新しく出来たもので、国産方は物産会社の創立に少しも関係がない」ことを、益田は強調している。

そして、「三井物産会社という社名は、ほかに付ける者がいないから私が付けたのであらうと思う。金がほしいのではない、仕事がしてみたいと思ったのだ。一生懸命にやった」と、『自叙益田孝翁伝』は語っている。

その頃、三池炭鉱は工部省の所管となっていたが工部卿伊藤博文の意向によって、この炭鉱が産出された石炭の販売が益田にまかされた。このため、会社が設立された明治9年8月には長崎に、また12月には鹿児島県口ノ津に三井物産会社の支店が開設されている。こうして、石炭はこの会社の主要取扱商品となり、「（三井）物産会社も三池の石炭を輸出したので海外に手が延びたのである」と、益田は語っている。

#### 4. 洋 行

一旦は開港に同意した横浜の鎖港を要請するため、幕府は文久3年（1863）に池田筑後守をヨーロッパに派遣している。益田孝は、父鷹之助の従者の資格で訪欧団に参加しているが、当時は「親子ともに外国へ行くことはならぬ制度故、別名益田進」を名乗った。『自叙益田孝翁伝』には、「文久三年の

洋行」の項で、この時の様々なエピソードが語られている。

こうして、益田は極めて早い時期に「洋行」を経験したが、この時、同じく通弁御用として随行していたのが矢野二郎である。帰国後の2人は、ともにフランス軍事顧問団の指導を受けたのち幕府の騎兵将校に任じられている。その間、益田は矢野の妹と結婚しており、2人は義兄弟の間柄となった。

ところで、現在の一橋大学の遠い源流となるのが、明治9年に銀座尾張町にあった鯛味噌屋の2階に開設された商法講習所である。我国最初の近代的商業教育を目指してこの学校を創設したのは、米国駐劔弁理公使の任務を終えて帰国したばかりの森有礼である。米国在勤中の森は、外国貿易に対応出来る新しい商業人の育成を痛感していた。商法講習所の開校間もなく、森は清国駐劔特命全権公使を命じられたため、明治9年5月に矢野二郎が校長の職を継ぐことになった。のちに東京商業学校、高等商業学校そして東京高等商業学校と名を変えていったこの学校は、明治10年代以降、三井物産、高田商会、大倉組に多数の貿易人を送り込んでいるが、これについては改めて触れることにする。

明治20年、益田孝は2度目の洋行をしているが、この時には三井高保などの同行者がいた。

大倉喜八郎もまた、早い時期における「洋行者」である。鶴友会編『大倉鶴翁傳』には、「翁は徐（おもむ）ろに大勢の趨（おもむく）所を看取した。『当分の間は戦争も起るまい。戦争が起らないとすれば、鉄砲の時代は既に過ぎた。宜しく新時代に適應する新商売に着眼せねばならぬ』と、炯眼早くも外国貿易に従事する決心を起した」とある。こうして明治5年4月、大倉喜八郎は通訳の手嶋英次郎を随えてサンフランシスコへ出発している。

その前年（1971）11月、岩倉具視を大使とする使節団の一行46人に留学生を加えて総勢100名ほどの日本人がサンフランシスコに向かって船出している。岩倉使節団は明治5年7月にロンドンに到着しているが、大倉喜八郎はこの地で一行と出会っている。

この時、使節団の随員数名がロンドンの銀行に預けていた所持金を失うと

いう事件があり、そのなかで随員の山田顕義少将は大倉によって助けられるという挿話が『大倉鶴翁傳』に紹介されている。長州出身の山田少将は、別働第二旅団長として西南戦役に従軍しているが、のちに伯爵に叙せられ、明治18年には司法大臣に任じられている。法律取調委員長として民法編纂を推進した山田顕義は、日本法律学校（のちに日本大学）の創設者としても知られている。

『大倉鶴翁傳』には、ローマで会った岩倉具視との挿話が語られている。「岩倉さんが、『イヤ之（これ）は珍しい何時来た』と云われ」、「一緒に食事をしたら』と誘われた。しかしながら、「一杯の文武官で、着席の余地もない」状態であったが、副使の伊藤博文が、『此所へ御出（おい）で』と、「自分と岩倉さんの間を空けられた」。

ところで、岩倉訪欧使節団に関しては、公式記録ともいうべき『米欧回覧実記』岩波文庫五冊があるが、晩年の大倉喜八郎が得意然として語ったと思われる前記のエピソードは記されていない。また、田中彰『岩倉使節団・米欧回覧実記』（岩波新書）など、岩倉訪欧米使節団に関する刊行書は多いが、大倉喜八郎が登場することはない。

ともあれ、喜八郎の洋行は、貿易商としての出発に役立っただけでなく、岩倉具視、伊藤博文あるいは山田顕義などの政府高官と接触し得たことに大きな意義があっただろう。あるいは、大倉喜八郎の欧米旅行の目的には、岩倉使節団との遭遇が当初から予定されていたのかも知れない。

帰国後の喜八郎は、明治6年10月に資本金15万円をもって大倉組商會を設立しているが、翌7年にはロンドン支店を開設した。「本邦人にして欧州に支店を置きしは実に之を以て嚆矢とする」と、『南海英傑傳』は記している。喜八郎は更に、明治17年及び同33年にも欧米を訪問しているが、これについては後述する。

益田や大倉に遙かに遅れて高田慎蔵の最初の洋行時期は、明治21年（1888）から翌年1月である。しかしながら、その頃のヨーロッパの兵器市場は活況を呈していた。

1875－78年の露土戦争を契機に、ギリシャ、トルコ、ブルガリアなどのバルカン諸国は軍備拡充に熱中しており、ヨーロッパの兵器製造会社は受注に迫られていた。更にこの頃から、新式兵器が相次いで世に出ている。例えば、アメリカ生まれの英国人ハイラム・マキシムが機関砲（正確には機関銃）を発明したのは1844年であるが、ガードナー、ガトリックなど従来の機関砲を遙かに凌ぐ性能を備えていることが次第に知られるようになったのも、この頃である。

英国とスウェーデンの合併企業であるノルデンフェルト銃砲製造会社は、1888年マキシム社に合併され、マキシム・ノルデンフェルト社となった。この会社は、潜水艦などの新兵器を手がけていたが、1897年には英国のヴィッカーズ社に合併され、ヴィッカーズ・マキシム社となった。

一方、1890年代を目前にして、欧米列強各国の建艦戦争が始まろうとしていた。装甲板の製造あるいは造艦造機技術の改良に力を注がれていた欧米諸国を訪れた高田慎蔵が、近代兵器に関する新知識を十分に吸収したことはいうまでもない。また「仏国巴里を過ぎ獨逸へ入っては私の方で代理店を引受けているクルップ銃砲（製造）場へ立寄った」ことを、慎蔵は『経歴談』で明らかにしている。

ヨーロッパに到着する前に、高田慎蔵は北米大陸を横断している。そして、「米国では鉱山事業が著しく発達して新式の機械も沢山出来たから、夫（それ）等を輸入して我国の鉱業に応ずる」ことを決めている。この時の慎蔵自身の現地調査に基づいて、明治24年には高田商会ニューヨーク支店が開設されている。そして、ジェームス・スコットの弟ロバートを支配人とし、「他に米人の手代と使丁（こづかい）及び夫人の会計掛」を雇っている。

高田商会ロンドン支店の支配人にもイギリス人が雇用されているが、「何故外国人を使ふ様にしたか」について、慎蔵は、『経歴談』において次のように説明している。

彼自身の経験によれば、日本人は「比較的に外人を信じることがない」。そして、「外国人を雇ふのは愛国心が乏しいのではないかとされるが（中略）、

其土地の外人を使ふのは非常に便利を得る」と、当然といえば、至極当然な理由を挙げている。現在、世界の各地に進出している日本企業は、現地人の積極的な雇用と、進出企業の現地化を心掛けているが、明治20年代における高田慎蔵の上記の意見は、彼が先駆的な貿易人であったことを示しているといえるだろう。

## 5. 西南戦争前後

明治7年の台湾征討に際して、陸軍省は「輜重、糧食、人夫の供給取締」を申しつけるべき商人を物色し、「東京、長崎の二、三者に之を交渉した」が、蓄地を恐れて誰も「之を肯んぜなかった」（『大倉鶴翁傳』）。しかしながら、大倉は「之を快諾し、君国のために努力する」べく、征台都督府御用達を受命した。土木工事を含めた兵站業務一切を遂行するべく、500名の軍夫とともに自からも台湾に赴いている。この時にも、喜八郎の豪胆振りを物語るいくつかのエピソードが誕生しており、伝記作者によって書き残されている。

台湾には、東京日日新聞記者の岸田吟香が大倉組手代の名目で喜八郎に同行している。ヘボン式ローマ字の創始者として知られているアメリカ人医者ヘップバーンから製法を教えられた目薬を「精錡水」と名づけて売り出していた岸田であるが、台湾出兵に同行したため我国最初の従軍記者と言われている。喜八郎とともに従軍した軍夫のうち、128人が現地の風土病にかかって病死したと、『大倉鶴翁傳』は伝えている。

征台従軍とともに、大倉組商会と明治政府及び陸軍省との関係は一層緊密となっているが、明治9年には江華湾事件が勃発している。この事件を契機に日韓修好条約が締結されているが、当時はまだ日韓貿易の端緒が開かれていなかった。新任の韓国駐劄弁理公使花房義質らの勧めもあり、大倉喜八郎は日韓貿易の先駆者となるべく、同じ年（1876）に釜山支店を開設している。

明治10年2月、西南戦争勃発とともに大倉組商会は陸軍御用達を受命しており、喜八郎自ら肥後において輜重輸送を指揮していた。『商海英傑傳』は、



「陸軍省会計官に附属して戦地に赴き八閏月間常に糧食被服等より其他百般の事務に任じ砲煙彈雨の間に起臥し肥薩の野を跋涉し功最も卓々人の耳目間にあり」と記している。

ところが、明治天皇の行幸とともに京都に在った内務卿大久保利通から上洛を求める急電が喜八郎に届いている。朝鮮半島では大飢饉に見舞われており、救済のための米輸送に従事するようにとの大久保の要請である。こうして朝鮮に渡った大倉喜八郎であるが、西南戦争の行方が気にかかり、イカ釣り漁船に便乗して帰国の途中に大暴風雨に見舞われて九死に一生を得たという冒険談が『大倉鶴翁傳』に詳しく紹介されている。

幕末動乱期の武器販売にかかわる彰義隊あるいは津軽藩の詰問とともに、暴風雨を冒しての対馬海峡の横断は、喜八郎の「冒険商人」振りをいろいろの恰好のエピソードとなっている。ともあれ、西南戦争もまた大倉喜八郎と明治新政府の関係を更に強化するべく役立っている。

一方、益田孝は、清国閩浙総督から借款要請があったため、大蔵卿大隈重信の依頼によって渋沢栄一及び大蔵省銀行局長岩崎小次郎とともに、その年（1877）1月に上海に赴いている。借款交渉は不調に終わったが、長崎まで帰ってくると西南戦争が勃発していた。

西南戦争に際して政府軍の兵站業務を受命したのは、上述の大倉組商會に三井物産会社と藤田組を加えた3社である。その頃、三井物産は輸出用に九州米を買入れていたが、西南戦争の勃発とともに、買付けられた米はすべて政府の軍用米に転用されることになった。そして、この時、西南臨時指揮役に任命されたのが、益田孝とともに先収会社から三井物産会社に転じた馬越恭平である。

大塚栄三『馬越恭平翁傳』（馬越恭平翁傳記編纂會 昭和10年）の「翁と西南戦争」の項には、「何しろ創業時代の事であり、資本金も十分でなかったので、巨額の利益を占めると言ふこともなかった」三井物産にとって「西南戦争の勃発と共に、同社が巨利を博すべき千載一遇の好機が到来した」と記されている。そして、「三井物産が、此翁（馬越恭平—引用者注）の活躍

により、一躍巨萬の利益を収めたのであるから、茲に三井物産は俄然として劃期的膨張を見るに至り、是と同時に翁は即ち三井物産の殊勲者として、其の敏腕を社の内外に広く認めらるるに至った」とある。また、同書には、後年における馬越恭平自身の談話が次のように紹介されている。

「明治十年の西南戦争は丸で福の神が飛込んで来た様なものであった。あの時は三井物産が十分の六、藤田組が十分の二、大倉組が十分の二の割で、政府の御用を一手に承ったので三井の純利益は一箇年五拾萬圓であった。」

西南戦役後、横浜支店長を命ぜられた馬越恭平は、やがて三井物産及び三井系諸会社の役員を歴任しているが、明治29年には三井物産会社を退社している。社内でライバル視されていた朝吹英二が好遇されたこと、あるいは三井とは無関係の中国鉄道株式会社の役員に就任したことが三井物産の内規に反するため辞任したとも言われている。その後の馬越は、日本麦酒株式会社々長に就任しており、「ビール王」と称されるようになった。のちに茶人として美術収集家としても知られるようになった馬越恭平は、同じく趣味人であった益田孝や大倉喜八郎とも親交があったが、これについては後述する。

西南戦争を契機に三井物産会社の業容は順調に推移しており、明治11年には資本金を20万円に増資している。更に同13年にはロンドン、上海、香港及びニューヨークに支店が開設されている。

アーレンス商会の若い社員であった高田慎蔵もまた、西南戦争前後の活発な武器需要を経験している。慎蔵自身が『経歴談』で語っているように、西南戦争に至る迄の時期には各地の不平士族が不穏な動きを示しており、明治政府による兵器の調達そして、砲兵工廠への機械及び資材の納入が活発であったため、兵器類の輸入を手がけていた外国人商館は多忙を極めていた。こうしてアーレンス商会の業容も拡大してゆき、明治6年（1873）には神戸支店を設置しているが、横浜とロンドンにも支店を開設するようになっている。

ところが、西南戦役の翌年、商会主H・アーレンスは、政府相手の商売に見切りをつけ民間企業と取引に切換えようと考えていた。一方、同商会の番頭であるマルティン・ベアはこれまで通りに政府機関特に陸海軍との取引を

続けてゆくことを主張し、二人の意見は対立することになった。結局、アーレンス商会は、横浜、神戸、ロンドンの各支店をもって民間企業との取引を中心に存続することになった。そしてベアは、築地にとどまって、ベア商会を設立している。

高田慎蔵は、兵器商社として新たに出発するベア商会の番頭となったが、この頃の慎蔵の収入は歩合制となっており、取扱高の5分（5パーセント）の手数料を得ていた。

## 6. 明治10年代の貿易商社

明治10年代前半における日本の経済について、益田孝の次のような談話が『自叙益田孝翁伝』に記されている。

「明治十年に西南戦争があり、十三年までは経済界は好況であったが、十四年になると、六月に松方さんが大蔵卿になって不換紙幣の整理に着手し、ぐんぐん引締めた。（中略）。

三井物産もずいぶん苦しんだ。私はあまり苦しんだものだから、とうとうしまいに酸っぱいものを吐いた。会社へ出て行った会社の屋根が見えると、また今日もこの屋根の下で苦しむのかと思って、胸が悪くなって来て酸っぱいものが出て来る」。

一方、当時の我国の貿易は、「外商」と言われていた外国人商館によって独占されており、「内商」と称されていた日本人貿易商による取扱高は、下表に見られるように極めて僅かな比率であった。

	輸 出 額 (万円)	内 商 取扱比率	外 商 取扱比率	いずれか 不 明		輸 入 額 (万円)	内 商 取扱比率	外 商 取扱比率	いずれか 不 明
明治10年 (1877)	2,335	3.6%	56.0%	40.0%		2,742	1.5%	95.8%	2.7%
明治20年 (1887)	5,241	12.5%	83.9%	3.6%		4,430	11.3%	84.3%	4.4%

(注) 上坂西三『貿易概論』（前野書房 昭和43年）による。但し、万円で4捨5入した。

こうした状況のなかで、明治13年（1880）には、政府機関が実施する「外国品購買之義ハ外商ニ頼ラズ成丈ケ内商ニ可頼」という内達が、三条実美大政大臣によって出されている。「スデニ支店ヲ海外ニ有スル内商モアル。其輸入ヲ奨励スル為多少ノ不便アルモ内商ニヨリ直輸入ヲ為スベシトノ趣旨」によるものである。大倉組商会及び三井物産会社が、「スデニ支店ヲ海外ニ有」していたことは、既述の通りである。

明治政府が目指した「内商」の育成措置は、陸海軍を中心に政府機関への納入が取引の中心であったベア商会などの「外商」にとっては、商権の消失を意味している。このため、「ベアは熟考の末、商売を廃める」と言いだしたことを、慎蔵は『経歴談』で明らかにしている。こうしてベア商会の商権は「3万円3ヶ年賦で」、新たに設立される高田商会に買取られることになった。「ベアは又之が為に深切に（取引先の）商会其他の労を取」ってくれているが、このあとマルティン・ベアは、ドイツに帰国している。

新しい商会の設立にあたって高田慎蔵は、以前の雇主であるH・アーレンスに出資を要請している。「アーレンスが資本を快諾して呉れた行為は誠に謝するに余り有りです。なぜならば、其頃は今日と違ふて、外国人が日本人と組合ふのは非常に危険で、法律も何もないから、万一日本人に不埒が有っても夫（それ）を訴える所がない」と慎蔵はその『経歴談』で述懐している。明治14年頃の日本人は、欧米人からは全く信頼されていなかった。だからこそ『七年程渠（かれ）の社に勤めた私の信用もあったのでせうが実に能くやって呉れた』と、H・アーレンスに対する謝意を繰返して述べている。

更に、ベア商会で働いていた英国人ジェームス・スコットが、もう一人の共同出資者となっている。慎蔵自身の評価によれば、「非常に『綿密な男』」である。

こうして、「3人で相互に間に取り結んだのは純然たる対等契約」であり、3人は各々同額の金額を出資市、同等の権利を持って商売を行い、同等の損益を分配することにした。そして、慎蔵、アーレンス及びスコットの3人は、各人「5千円づつ持寄り、合計1万5千円を資本として銀座3丁目18番地へ

店を構へた」のは、明治14年（1881）1月のことである。

「内商」（日本国籍の商社）であることを明らかにするため、高田慎蔵が名義人となり、高田商会と称した。欧米から各種機械、船舶、鉄砲、弾薬類を輸入して陸海軍などの諸官庁へ納入するのが、この新しい貿易商会の主要業務であるが、兵器商社高田商会の誕生である。

ドイツ人とイギリス人を共同出資者とした高田商会は、まぎれもなく外国資本との合弁企業であり、当時としては稀少な存在であった。慎蔵自身は『経歴談』で次のように語っている。

「其此（そのころ）は外国人と組合ふたとでもいえば頗（すこぶ）るいやな感情を持たれる時代でしたから、私は此（この）内部を秘密にして是まで誰にも言はない……今日貴方にお話するのが始めてなのです」と対談の雑誌記者に打明けている。

開業当時の高田商会の社員は、英人ジェームス・スコット及びその弟ロバート。そして、ベア商会ロンドン支店に勤務していたイギリス人2名をそのまま引継いで、高田商会ロンドン支店としている。ちなみに、明治9年7月に創設された三井物産会社の開業当時の社員数は13名であったが、数か月後には三井国産方の社員52名を吸収しており、合計67名の陣容であった。

明治初期において、「内商」といわれる日本人貿易商が取扱っていた商品は、生糸・茶などの一次産品の輸出が主流であった。「売込み問屋」といわれていた生糸輸出商の取引相手は、横浜や神戸の居留地に進出していた外国商館である。その頃の横浜の生糸商としては、茂木惣兵衛、原善三郎、若尾幾造などの名が早くから知られていた。

「横浜の商人はいっこうに外国語を学ばない。着物も日本服である」と、益田孝は指摘している（『自叙益田孝翁伝』）。益田あるいは高田慎蔵のように、若い頃の外国商館勤めを通じて英語と貿易実務を身につけた商社経営者は、当時はそれほど多くはなかった。それだけに高田慎蔵には、取引を拡大するチャンスが残されていた。

「富国強兵」というスローガンが盛んに用いられるようになったのは、明

治16年頃からである。つづいて、「殖産興業」が叫ばれるようになり、我国産業の近代化に拍車がかけられた。兵器を中心に欧米の先進機械を輸入していた高田商会にとって、こうした気運が有利に働いたことはいうまでもない。

前出の私家版回顧録『高田商会開祖高田慎蔵翁』には、明治16年（1883）7月、高田商会大阪支店が、外国品購買に関して大阪造幣局に提出した願い書が転記されている。その頃の高田商会の業務の一端がうかがえるので、以下に引用する。

「弊店高田商会の儀は明治14年初めて東京京橋區銀座3丁目18番地に本店を設置し銃砲、其他外国品の購買營業仕陸海軍初め官省の御用相達爾來日を遂ひ營業盛大に及び英国龍動（ロンドンー引用者）に支店を置き、獨逸『クルップ』製造場、英国『セッフキールド』鋼鐵製造場其他獨逸『クロゾン』諸器械製造場等合わせて8ヶ所に弊社の代理店を結約し且昨年（明治15年ー引用者）より當府下（大阪府ー引用者）に支店を設け本店同様營業仕り既に當地に於ても砲兵工廠工作分局鎮台並に府立病院の御用達罷在候（後略）」。

また、「本支店共深く信任せる外国人数名を雇入（れ）各国製造の物品を精査せしめ」とあるが、当時の高田商会の業務が、もっぱら専門的な各種機械の輸入販売であったことを示している。

## 7. 兵器商社と日清戦争

明治20年4月、大倉喜八郎は、大阪の藤田伝三郎らとともに資本金50万円（一説には500万円）の内外用達会社を設立しているが、その目的は陸海軍需品の供給である。明治26年の商法公布にあわせて同年11月には内外用達会社を解散させるとともに、従来の大倉組商會を合名会社大倉組に改称している。

ところで、西南戦争で大きな利益を得た三井物産会社と大倉組にとって日清戦争は大きな商機であるが、高田商会もまた戦時利得の獲得に参加している。

明治27年8月1日、清国に対して宣戦が布告され、広島に大本營が設置された。物資輸送の拠点となった大倉組広島支店長には賀田金三郎が就任して

いるが、日清戦争後は大倉組台湾総支配人に任命されている。糧食、衣服などの軍用物資は主として大阪において調達されたため、同社大阪支店も多忙を極めることになった。

開戦とともに、三井八郎右衛門、岩崎久弥、澁澤栄一などの有力実業家によって報国会が結成されており、軍事公債の引受けを国民に訴えていた。三井物産は、有明丸、布引丸などの社船6隻をはじめ、アジア地域に來航していたドイツ、オランダ、ノルウェーなどの貨物船20隻あまりを用船して軍用に供している。こうして三井物産は、石炭の輸入、軍需物資の運搬などの戦時輸送に全力を注いでいた（星野清之助『三井百年』鹿島研究所出版会 昭和43年）。

日清戦争当時の日本陸軍の兵站輸送能力あるいは軍事用構築物の工作能力は極めて貧弱であった。そして、近代日本が経験した最初の本格的な対外戦争の遂行には有力な民間企業の協力が必要であり、三井物産、大倉組、高田商会のいずれにとっても、この戦争は大きな商機であった。

高田商会の場合、既に緊密な関係にあった陸・海軍省の特命によって、欧米各国において兵器並びに各種軍需物資を買付けるとともに、一般物資の買付けにも従事していたから、巨額の利益を得たことはいうまでもない。

慎蔵自身の回顧によれば、「火薬の原料である所の硝酸曹達」などの重要物資を、「わざわざ非條約国の南亜米利加」から輸入したと語っているが、南米チリからの輸入であろうか。またこうした非常時にあって、必要資材を「非常に安値で供給」したことから、砲兵工廠の提理（長官）が「拙者の在職中は屹度お前から品を買ってやろう」と約束してくれたことを明らかにしている。

「日清戦役に就いては随分働いた」と、慎蔵自身が語っている。また、世間では「私（慎蔵）が戦争を利用して法外の利益を貪ぶったかの様に噂して居るさうである」ことを認めている。

日清戦役後の我国は、いずれ予測されるロシアとの戦争に備えて、陸軍諸工廠の拡充に伴う各種機械装置の発注そして、海軍から発注される軍艦の建

造が、高田商会の事業展開に寄与している。

ところで、明治元年から同14年に至る迄の我国の貿易収支は当然ながら輸入超過であったが、明治15年から同26年迄の期間では出超となっている。しかしながら、外国船に対する海上運賃の支払いなどによって貿易外収支は大幅な赤字を計上している。更に、日清戦役時の軍事輸送においては船舶不足に対処するため、大量の外国船が購入された。

こうした状況を背景に、明治26年には航海奨励法案が国会に提出されており、明治29年に至って航海奨励法並びに造船奨励法が施行されている。これによって外国航路に就航する船舶に対して、また、総トン数 700トン以上の鉄・鋼船に対して奨励金が交付されることになった。このため明治30年以降、日本郵船あるいは大阪商船などの海運会社というまでもなく、三井物産あるいは三菱合資会社など商社による船舶の購入及び造船が増加している。

高田商会も、日清戦争当時においてはヨーロッパからの兵器輸入のため、輸送船 8 隻を購入している。更に戦争終結後においても貨物輸送のために、明治30年と32年には積載量 1,500トンの勢徳丸及び同 2,000トンの相川丸を購入している。

日清戦争時において我国の船舶保有量は大幅に増加しており、明治28年末現在では総数 528隻、総トン数 331,374トンとなっている。これらの数字から単純に 1 隻当たりの平均トン数を算出すると、628トンほどになる。明治30年及び32年に高田商会が購入した前記の 2 隻の貨物船は、当時としては遜色のない積載量を有していたといえるだろう。

兵器商社である高田商会は、その設立時から、陸軍に対して多岐にわたる軍器及び軍器素材を供給している。日清戦役においては、「陸海軍両省の特命に依り欧米各国より兵器を購入し之が回漕に従事し商会の基礎を固むるに足る充分の利益をあげると共に」、陸海軍発注の軍艦あるいは「陸軍諸工廠拡張用諸機械類の注文」など、各種機械・資材類の輸入によって、「英独仏米等の工業界に於ける（高田商会の）名声は益（々）高まるに至れり」と、前出の志保井重要氏の私家版回顧録『高田商会開祖高田慎蔵翁並 多美子夫



人』に記されている。

## 8. 台湾進出

日清戦争の終結とともに、大倉喜八郎は旅順、大連、金州への支店開設を計画していた。しかしながら、三国干渉の圧力によって遼東半島が返還されたため、この計画も断念しなければならなかった。一方、日清戦争後に領有された台湾では、軍政から民政への移行とともに台湾総督府による本格的な統治がすすめられていった。

台湾における植民地経営に対して、政府は有力な実業家達の協力を必要としていたが、伊藤博文及び第二代台湾総督桂太郎大將らの要請もあって、大倉喜八郎は明治29年（1896）12月に台湾へ旅行している。台湾では、3回にわたって第3代総督乃木希典を総督府に訪問しているが、多忙を口実に面談を断られ、やっとの思いで官舎での面会が許された。しかしながら乃木は、「本官は商人と直接の交渉を好まぬ、止むを得ざる必要の場合は五分間を限り面会することにしい居る。予め左様承知してもらひ度い」と、極めて冷たくあしらわれたエピソードが伝えられている。

万事に厳格な乃木將軍は、政商の代表的存在である大倉喜八郎を嫌っていた証拠として、上記の挿話は広く流布している。これまで再三にわたって引用した『大倉鶴翁傳』には、上記のいささか不名誉なエピソードは語られていないが、同じく鶴翁会編纂の『鶴翁余影』（昭和4年）には、乃木総督の面談に関して、大倉喜八郎の以下の談話が紹介されている。

乃木から許された「五分間や六分間」の面談では、「到底殖産の事も興産の事も話の出来る者では無く、かかる総督のもとでは到底商売は出来兼ね次第であるから、早々引下げて帰京し委細を伊藤さんや桂さんに話す積りであ」った。しかしながら、「総督は永久のものに非ず、然し台湾は永久のものである。（中略）台湾の存在は、永久性を帯びて居る、此処は決して癩癪を起す可き場合では無く、国家の為め忍耐す可き所である」。

喜八郎また、明治天皇にも嫌われていたという伝説が伝わっている。その

真偽のほどはさておいて、後述するようないくつかの風評とともに、大倉喜八郎は否定的なイメージが伴う実業家である。

明治31年（1898）2月、乃木総督に代って児玉源太郎が第4代台湾総督に任命されているが、同時に後藤新平が民政局長に就任して台湾に赴任している。前総督の乃木から冷い仕打ちを受けていた喜八郎にとっては、誠に喜ばしい総督交替であった。更に、児玉・後藤のコンビによって、植民地台湾の本格的な殖産興業政策が推進されることになった。

早速、大倉喜八郎は台湾鉄道会社設立登記人に名を連ねるとともに、政府の保護による近代的金融機関の設立を主張していた。その後、鉄道官営論が台頭すると大倉はこれに同調し、台湾鉄道会社の発起人會も解散している。しかしながら、官営による台湾縦貫鉄道敷設工事において、大倉組の受持区域は大きなシェアを占めていた。

一方、明治32年9月には資本金 500万円（5万株）の台湾銀行が開業しているが、うち 100万円が日本政府によって引受けられており、大蔵大臣が筆頭株主である。台湾銀行創立委員に任命されていた大倉喜八郎は、同行設立と同時に監査役に就任している。台湾銀行第2位の株主である賀田金三郎（4338株）は、大倉組台湾支配人であったが、その年（1899）独立して賀田組を設立している。第3位の株主は大倉喜八郎（2,652株）、第4位は内蔵頭に代表される皇室（2,522株）である。

その前年（明治31年）7月、台湾の経済開発を推進する民間団体として台湾協會が設立されているが、大倉喜八郎は創立委員に選ばれていた。第2代台湾総督を務めた桂太郎大將を会頭に、大倉は会計監督に就任した。台湾協會設立時の高額寄附者には、岩崎家の2名 各2,500円、三井家の2名同じく各 2,500円の名がみられる。大倉喜八郎は、渋沢栄一、安田善次郎などとともに 1,000円を寄附している。また、500円の寄附者40名のなかには、益田孝及び高田慎蔵の名がみられるが、他に横浜の有力砂糖商である安部幸兵衛及び増田増蔵も名を連ねている。ちなみに、『値段史年表 明治・大正・昭和』（朝日新聞社 昭和63年）によれば、明治30年頃の巡査の初任給 9円、

小学校教員の初任給 8 円という時代である。

台湾協会の重要な事業として、台湾協会学校の運営が挙げられる。植民地における下級官吏の養成を目的に、この学校は明治33年に開校された。第1～4 回同校卒業生の就職先は、台湾総督府の26名が第1 位であるが、台湾銀行の16名のほか、三井物産・三井洋行の7 名、大倉組5 名となっている。この学校は、明治40年には東洋協会専門学校と名を改めているが、現在の拓殖大学の遠い源流である。

なお、上記の記述は、大倉財閥研究会『大倉財閥の研究—大倉と大陸』（近藤出版社 昭和57年）所収の森久男「初期大倉の対外活動」を参考にさせていただいた。

ところで、益田孝は「明治31年に台湾へ行ったのは、樟脳や基隆の石炭のことなどが主なる目的であった」と、『自叙益田孝翁伝』で語っている。

明治33年12月、台湾製糖株式会社の創立総会が開催されているが、益田孝が発起人会長として議事を進行した。資本金 100万円（2 万株）をもって設立された同社の筆頭株主は、1,500株を所有する三井物産合名会社である。ついで、1,000株主が内蔵頭（宮内省）と毛利元昭公爵である。500株の株主11名のなかには、益田孝、住友吉左衛門、藤田伝三郎などの名がみられる。

台湾製糖は台湾総督府の助成金が交付されていた国策会社であるが、その製品は三井物産によって一手に販売されていた。

一方、大倉喜八郎は最大手の砂糖商である安部幸兵衛と提携して、明治42年に資本金 500万円の新高製糖株式会社を設立している。第一次世界大戦の好況に遭遇したものの、戦後の砂糖価格の下落に直面するとともに、原料購入価格の上昇によって同社の業績は悪化していった。昭和2 年、大倉は持株とともに新高精糖の経営権を大日本に譲渡しており、製糖業から撤退している。

台湾における大倉組及び三井物産の事業展開を比較して、前出の『大倉財閥の研究』は次のように指摘している。

「領台初期大倉組は御用商人・請負業者として手広く台湾事業を経営したが、総督府の殖産興業政策の重点が官営事業の経営から民間産業の保護育成

政策へと転換していく中で、民間産業におけるみずからの事業基盤の確立に失敗した。これに反し、三井は領台初期には目立った事業活動を展開しなかったが、台湾製糖の設立を契機として、民間産業における強固な事業基盤を築きあげていった。そのため台湾事業界における大倉組の地位は、歳月を重ねるにつれて三井によって大きく引き離されていった。とくに製糖業における立後れは、大倉組の台湾事業の規模拡大を制約する大きな要因であった」（前掲書94頁）。

## 9. 新規事業の展開

明治20年代から30年代そして40年代へと、日本の産業革命は大きく進展していった。この時期、有力な実業家達は積極的な起業家であり、更に財を蓄積してゆく機会に恵まれていた。

「新しもの好き」で知られていた大倉喜八郎は、新しい事業の取組みにも積極的であった。

勝田貞次『大倉・根津コンツェルン読本』＜日本コンツェルン全書10＞（昭和13年 春秋社）には、大倉財閥の特色が簡潔に記されている。先ず、「第一の特色は、（中略）先代大倉喜八郎氏の遺訓が、依然として残って居て、従って、近代財閥の特徴たる組織の力による経営にまで、未だ発展していないことに依るものであると見られる」。

そして、「第二の特徴は、大倉財閥の投資分野が、非常に広汎に渡って居ることである。而も、その割合に、その間の關聯性と云ふか、脈絡が非常に乏しいことである。（中略）大倉王国の事業は、一世の商才、先代喜八郎が新しいもの好きの特性を発揮して、次ぎから次ぎへと新事業を企図して行った。その結果、各業間の相互間に脈絡が無く（中略）、大倉財閥に於ては、優秀なる事業が、他の財閥に比して、非常に少なく、今日に於ても、その然るを見る原因も茲にあるが如くである」。

更に、後継者である大倉喜八郎には、事業に対する積極的に欠けていたことを、第三の特徴としている。というのも、「先代喜八郎氏の初もの喰い狂

から、事業が分散的で中心的事業に乏しく、ために、それが整理収拾のためには、勢ひ保守的にならざるを得ないからである」。

『大倉財閥の研究』所収の「大倉財閥関係年表」を参考に、大倉喜八郎の「新しいもの好き」を具現する事業の展開を辿ると次のようになる。明治4年に日本橋本町に洋服裁縫店を開業しており、同年横浜に横浜商会を開設しているが、『商海英傑傳』によれば「本邦石造の家屋は実に此時より始まる」とある。

同じく明治4年に銀座の煉瓦街建設工事に参加しており、同14年には喜八郎が設立した土木用達組が鹿鳴館の建設工事を請負っている。その翌年には、渋沢栄一とともに東京電燈会社の設立を出願しており、同じく渋沢らとともに大阪紡績社を設立している。更にその年（1882）、「銀座街頭大倉組の店頭に、明煌々なる『アークライト』を點燈した。是が抑々（そもそも）電燈を日本に紹介した初めてであった」と、『大倉鶴翁傳』は伝えている。明治19年には、渋沢栄一とともに帝国ホテルを設立しているが、起業家大倉喜八郎は、人目につき「忽（たちま）ち大評判となる」事業を手がけるのを好んでいた。

ちなみに、『大倉鶴翁傳』の第二編「事業経営時代（上）、（中）、（下）」の3章にわたって、合名会社大倉組から北海道大倉農場に至るまで、喜八郎が関係した合計34社の企業及び事業が記述されている。また、同書第三編には、「對支事業経営時代（上）、（中）、（下）」の3章がある。ここでは、中國大陸に進出した大倉関係の事業22社がとりあげられている。

一方、三井物産は明治26年7月に合名会社となり、公称資本金を100万円としている。そして、日清戦争後から明治30年代前半に至る時期、同社の貿易取引は本格的に拡大していった。明治36年現在の同社々員は540名に達しており、店舗42箇所のうち、海外支店12箇所となっている。

第一物産会社編『三井物産会社小史』（1951年）には、「三井物産会社利益金年度別表」が記載されている。それによれば、明治25年に226千円の純益を計上したのち、急速に業績が向上している。特に、日清戦争時の明治27

年には 633千円、翌28年に 1,087千円の純利益を計上している。日露戦争時の明治37年度の純益は 2,211千円、その翌年は 2,374千円である。更に明治44年には 6,015千円、45年には 5,361千円の純益を達成している。三井財閥の中核的存在であった三井銀行の純益は44年度 2,346千円、45年度 2,900千円であったが（『三井銀行八十年史』）、三井物産は大きく引き離されている。

ところで、高田慎蔵は明治29年（1896）6月から12月にかけて再度欧米に出張している。帰国後は積極的に新規事業に進出しているが、我国産業の近代化への過程と歩調を合わせることになった。本来、高田商会の業務は陸海軍への兵器及び物資の納入が中心となっていたが、明治30年代には、農商務省の管轄下にあった官営八幡製鉄所などの諸管庁そして民間企業へと取引先はひろがっている。

明治30年（1897）2月、農商務省は福岡県八幡村に製鉄所を建設することを決定している。こうして誕生する我国最初の近代的な一貫製鉄所である官営八幡製鉄所の設置に関して、高田商会は各種設備の納入を受注している。後述するように大正6年（1917）、八幡製鉄所疑獄事件によって当時の高田商会無限責任社員（代表者）高田信次郎が懲役10か月の判決を受けているが、高田商会と八幡製鉄所の関係の深さをうかがわせる事件である。

明治32年には鉄道車輛の国産化を図るべく合資会社汽車製造会社が、大阪に設立されている。この時の出資社員20名には、澁澤栄一、安田善次郎、大倉喜八郎など当時の有力な実業家にまじって、高田慎蔵も参加している。こうした新規事業への参加は、いわば当時の財界活動の一環ともいえるだろうが、この頃の慎蔵は、事業の多角化を考えていたともいえるだろう。

ところで、我国最初の電力会社は、大倉喜八郎、益田孝、三野村利助などの実業家9名を発起人として明治16年に設立された東京電灯会社であるが、東京府下全域を電力供給地域として業容を拡大していった。一方、高田慎蔵も発起人の一人となって、明治24年（1891）に設立された帝国瓦斯電灯会社は、関東、北陸など広範囲にわたる電力供給区域を有していた。のちに帝国

電灯会社となり、大正15年（1926）には東京電灯会社に吸収されている。こうして、東京電灯会社は関東地域のいくつかの電灯会社を吸収しているが、今日の東京電力の遠い前身である。

明治20年代以降の我国においては、電力需要が増加の傾向を示すようになっているが、高田商会は、明治30年（1897）にウェスチングハウス社の日本総代理店に指定されている。日本各地で急速に建設されていった水力および火力発電所設備の納入に関しては、三井物産、大倉組とともに、この分野のシェアを分けあっていたが、高田商会を含めた3社による寡占状態にあった。

こうして、発電機などの重電機類を中心とする各種電気機器は、製鉄用機械、鉱山関連機械類とともに高田商会の民需用機器部門の主要取扱商品となっていた。

## 10. 武器商人のイメージ

大倉喜八郎が82歳の時、その庶子として誕生した大倉雄二の『逆光家族―父・大倉喜八郎と私』（文藝春秋 1985）は、興味深い資料である。いずれ再三にわたって参考になることになるが、同書に次のような一節がある。

「私たち一族のものが嘲られるとき、非難されるとき使われる言葉はいつも『大倉の石コロ罐詰』だった。一説には台湾の役の、また一説には日清戦争の、軍夫の食糧に大倉組が納入した罐詰の中には肉の代りに石コロが詰っていたという。いかにも明治らしい庶民調の悪口は戊辰戦争のときの死の商人的活躍と一緒にあって、長いこと信じられて来た」。

日清・日露の両戦役によって大きな戦時利得を得たと思われる大倉喜八郎については、様々な悪評が流布しており、その後も永くにわたって伝えられていた。前述の「石コロ罐詰」は最も広くゆきわたっている伝説であるが、その他にも大倉組が供給した牛肉罐詰を食べた姫路師団の兵士が黒い血を吐いたといった、いかにも具体性を持たせたような風評もあった。更には、大倉組が納入した軍靴は、糊で貼りつけた粗悪品であるため、旅順閉塞作戦に参加した水兵の靴が濡れ、裏皮が剥がれたため転落して溺死したといった、

まことしやかな噂話もある。戦争のたびに莫大な利益をあげていった大倉喜八郎に対する反感が、こうして悪評を生み出していったのだろう。

革命浪人として知られる宮崎滔天は『三十三年の夢』を書き残しているが、大倉喜八郎に関する次のような記述がある。

明治31年（1898）米西戦争勃発に相前後して、フィリピンにおける独立運動が活発になっていた。その翌年、宮崎滔天らが手配したフィリピン独立軍へ供給される弾薬類を積んでいた三井物産会社所有の布引丸が途中で沈没しているが、これらの武器は大倉組から購入されている。一方、武器類の積出しにあたっては日本政府の規則があり、大量の兵器類は大倉組に保管されたままとなっていた。

更にその翌年（1900年）、清朝政府の打倒を目指した革命勢力が、湖北省惠州で蜂起している。革命軍への武器供与のため、滔天は大倉喜八郎にかけあっているが、『三十三年の夢』では、「大倉」でなく「小倉」と記されている。犬養毅（のちに首相。三・一五事件にて暗殺される）や中村弥六（衆議院議員司法省次官などを歴任）が介在していた事情は、『三十三年の夢』の「与孫逸仙書」の項に詳しい。中間に介在した中村が三万円ほどの金額を着服していたため、元来が孫文らによって支払われ、フィリピン独立軍に振向けられようとした武器の代金六万五千円の返済が紛糾した。結局、大倉組は一万五千円を弁済しているが、喜八郎との交渉に憤慨した滔天は、「抑（そもそ）も小倉に至って吾を罵詈するとは何事ぞ。小倉何者ぞ。一商人にあらずや」と記している。滔天が「大倉」を敢えて「小倉」と記しているのは、喜八郎の如き武器商人が「大倉」を名乗るのは僭越であり、「小倉」で充分といったところなのだろうか。

中国への武器輸出に関して、明治41年に「辰丸事件」が発生している。安宅商会（のちの安宅産業）が輸出した中古銃と弾薬を積荷として第二辰丸が、清国の軍艦にだ捕された事件である。積荷の武器類が革命軍の手に渡ることを懸念していた清国政府に対して、日本政府は強硬に抗議している。日本側の要求に全面的に屈服した3月19日をもって「屈辱記念日」と称されるよう



になり、日貨排斥運動へと発展していった。

上記の中古兵器類が革命軍の手に渡る予定であったのかどうかは不明であるが、日本の商社は清朝政府へ武器供与を続けていた。黒竜会の主幹であり、明治期から昭和期を通じて国粋主義運動の大立者であった内田良平は、明治41年10月、益田孝に書簡を寄せている。三井物産、大倉組及び高田商会による清朝政府への兵器供給の中止を要請しているのが、革命軍に同調する内田の書簡の内容である。

森辛傳『孫文の革命運動と日本』＜東アジアのなかの日本歴史＞（六興出版）によれば、内田良平はまた、益田孝のルートを通じて、革命軍に援助を与えるよう当時の西園寺首相に働きかけている。その結果「1912年（大正元年）1月24日三井物産と上海都督軍との間に30万円の借款契約が成立し、革命軍はこの借款で31年式砲6門、31年式連射山砲6門、機関砲3挺を三井物産を通じて購入した」。辛亥革命によって誕生した中華民国政府は、「その後、蘇省鉄道を担保とする借款 250万円、漢冶萍会社の借款 300万円を利用して日本から兵器を大量に購入した。三井物産の借款は、実は裏で日本政府が提供したものであり、兵器は軍部が提供」したものである。その前年には、三井物産（名義は「泰平組合」）を経由して清朝政府に供与していた明治政府は、翌年には、同じ三井物産を経由して革命政府に兵器類を提供するという変わり身の速さである。

三井物産、大倉組及び高田商会の3社を構成メンバーとする「泰平組合」については、のちに詳しく触れることになるが、有力な機械商社であった高田商会は、兵器商社として三井物産及び大倉組に決してひけをとらなかった。

日露戦争時における明石元二郎の関係については、既に多くが語られている。その概要は以下の通りであるが、兵器商社としての高田商会の一面を知ろううえで興味深い。

日露戦争開戦時、在ロシア日本公使館付陸軍武官であった明石元二郎歩兵大佐（当時）が、開戦後はロンドンを中心にヨーロッパ各地において、反ロシア勢力を支援するために様々な謀略活動を展開していたことは良く知られ

ている。なかでも活動は、スイスで購入した小銃2万5千挺と弾薬420万発を黒海及びバルチック海方面に輸送し、革命派勢力に供与するという作戦である。

その頃ロンドンに本拠を置いていた明石は、高田商会ロンドン支店の協力を得ることにした。陸軍と関係の深い大倉組あるいは三井物産も当時のロンドンに支店を設置していたのだが、明石は敢えて高田商会の協力を求めている。

小森徳治『明石元二郎 上・下』（昭和3年 台湾日々新聞社）はのちに台湾総督となった明石大将に関する詳細な伝記であるが、次の一節がある。

「そこで、我が高田商会の倫敦支店に事情を打明け、萬事の世話を依頼することとすると、支店長の杉谷卯之助氏（仮名）は又、店に關係の深い友人スコットに相談して、以下の如き案を立てた。」

ロッテルダムにある高田商会の代理店「コルドネ商会」及び「英国の高田商会の取引先なるワット」などの協力を得て、ロシア国境近くまで秘かに兵器類を輸送するという作戦である。更に、銃器類の輸送に使用された「ジョンクラフトン号の購買も、亦高田商会の盡力に待ったものである」と、前掲書に記されている。

既に紹介した志保井重要氏の回顧録『高田商会開祖高田慎蔵翁並 多美子夫人』には、「陸海軍両省の特命に依り海軍依り兵器弾薬其他材料品等の購買及運搬に従事す」とある。更に、「同年（明治37年—引用者）大本營の内命に依り特別任務に従事したるも事秘密に属するを以て茲に記載する能わざるも幸に瑕なく其大任を果したり」と、いささか秘密めかした記述が続いているが、前述の明石大佐に關係する「特別任務」である。

「日露戦役の行賞に際し、高田慎蔵が一商估の身を以て勲四等の栄勲を辱うするに及んで、人或は其何んの故なるを怪しみたらんにあらんも、実は此兵器輸送問題に就いての、少からざる功勞を表彰されたものである。」

と、小森徳治『明石元二郎 上巻』にある。

「此兵器輸送問題」とは、反ロシア政府勢力に対する武器輸送を指してい

るが、むしろ、欧米における各種軍需物資の買付け及び、日本への輸入に対する高田商会の活動が、日露戦役の活動が、日露戦役後賞されたものと理解されるべきだろう。従って、高田慎蔵以外にも、高田商会ロンドン及びニューヨーク支店に勤務していた英米人社員に対しても勲五等を、ロンドン支店支配人広田理太郎、同支店長代理柳谷己之吉及び同支店勤務の志保井重要な3名には勲六等旭日章が授章されている。他にもこの戦役への功勞に対して、高田信次郎など社員5名が勲六等瑞宝章の叙勲を受けている。まお、前出の『明石元二郎 上巻』に、「支店長の杉谷卯之助（仮名）」とあるのは、支店長代理柳谷己之吉である。

いずれ改めて触れるように、明治の半ば頃から大正期を通じて、高田商会と海軍の関係は何かと取沙汰されている。『日本の下層社会』の著者として知られる横山源之助は『明治富豪史』（明治43年刊）を書いているが、その第一節「戦争」には、次のような記述がある。

日露戦役で巨額の利益を得た岩崎家あるいは三井家などの財閥は別格としても、陸軍省の用命を受けた大倉喜八郎と、「海軍省の御用命を受けた高田慎蔵」は、稼ぎ頭として「東西の両大関」である。そして、大倉組や高田商会を傍で見ていると、戦争のお蔭で「毎日毎日身代が太ってくる」のが眼に見えるようだと記しており、彼等にとって「戦争は福の神」と極言している。

上の文章は、もともと明治38年9月から翌年3月まで雑誌『商業界』に連載された「明治実業暗黒史」の一節である。日露戦争の戦後処理に大きな不満を抱いていた民衆の「受け」を狙った誇張が感じられるにしても、御用商人といわれていた大倉組や高田商会に対する当時の人々の意識の一端を示しているといえるだろう。明治30年の終り頃には「高田商会と海軍」の関係が、広く知られるようになっていたことを示しているともいえるだろう。

## 11. 権力者とのつながり

政商といわれた大倉喜八郎、益田孝、そして高田慎蔵は、いずれも明治・大正期を通じて、それぞれの時代の第一級の権力者達と緊密な関係にあった。

『自叙益田孝翁伝』には、明治期の有力政治家達の名前が極めて無造作に頻出する。その一節に、「維新の元勳では、私は井上さんといちばん親しかった。山県さんはここ（小田原）へ隠居してからである。私は木戸孝允さんも知っている」とある。

「井上さん」とは、政治家のなかでも三井財閥と最も関係が深く、「三井の番頭」として揶揄された井上馨である。「山県さん」は、言うまでもなく陸軍の元老山県有朋である。明治41年、山県、益田そして大倉喜八郎の3名が揃って小田原に広大な別荘を構えている。山県の別荘は古稀庵と称され、これに隣接する益田の別荘は掃雲台と名づけられていた。そして、大倉の別荘には共寿亭が建てられていた。現在に椿山荘を残している山県有朋が、造園に深い趣味を持っていたことは良く知られているが、小田原の別荘庭園にまつわる2人の交流が、『自叙益田孝翁伝』に語られている。

明治19年内務大臣の職にあった山県に同行して、益田は沖縄を視察している。船中で山県の悪戯にひっかかった益田は、帰路大阪で散財することになるが、「こんな悪戯は井上さんにはいくらもあったが、いつも引っ掛かったことがなかった。まさかと思う山県さんにやられたのは、実に千載の恨事である」と、益田は『自叙益田孝翁伝』で語っている。陰湿なイメージが強い軍人政治家山県有朋であるが、益田孝とは無邪気な悪戯が仕掛けられる程の親密な関係にあったことをうかがわせるエピソードが同書に紹介されている。

ところで、「万潮報」は明治31年7月7日から2カ月にわたって名士の「蓄妾攻撃」を紙上で展開している。当時の名士など490名の蓄妾の実例を暴露しているのだが、単なる暴露記事ではなく、「日本婦人の地位」向上を目的としたキャンペーンであると、同紙は主張している。そして、同年7月11日付紙上に次のように記されている。

「三井物産の益田孝は、日本橋区茅場町48番地の別宅に、吉田たき（31）なる妾を蓄う」。更に、その実妹の「山登（やまと）ことお貞は」「元帥大将侯爵山県有朋」の「妾となり、（中略）その後いつとはなしに本邸に入り込む」とある。

小林一三『逸翁自叙伝』（阪急電鉄株式会社 昭和54年）には、「松風閣の思い出」の項がある。大正5年頃と思われるが、「山県公爵は夫人同伴（或は愛妾であったかもしれない）益田孝氏と三人」を、小林一三が大阪郊外の松風閣に案内した。小林が見た「益田さんは実に慇懃丁寧の口ぶり、お話する時は必ず軽く頭を下げ御返事するだけである。その態度に驚いた」。更に、山県が同伴した女性は、前述のように益田の「愛妾たき」の妹であり、「公爵夫人とは御縁のある間柄であるといふにも拘らず、恰も主従の如き応答で」あったことに、小林は感心している。

元芸妓の「お貞」は、早くに夫人を亡くした山県から家事を任せられていた。貞子を名乗っていた彼女は、和歌を良くしたと伝えられている。彼女の姉である吉田たきについて、福沢桃介『財界人物我観』（昭和4年に経済雑誌「ダイヤモンド」に連載。1990年図書出版社刊）は、次のように記している。

「益田の昔の愛人、今の茶仇に、お滝の方というのがある。この人も益田の教化を受けたものか、なかなか茶道に精通している。その上益田よりも大胆で、株式の売買思惑がすこぶる上手だ。一時はその資産五百万円に上ったこともあるという。（中略）ただの女にはできない。たしかに、女流中の傑物といってもよからう」。

お滝と貞子の2人の女性は容色にすぐれていただけでなく、並みはずれた「傑物」であったようである。そして、お互いの愛人が姉妹であるというデリケートな関係は、益田孝によって仕組まれたのかも知れない。とはいえ、益田は山県に対して礼を失しないように常に心掛けていた。

益田の実妹繁子は、津田梅子、山川捨松らとともに明治4年11月、米国に留学している。のちに男爵瓜生外吉と結婚するが、友人の山川捨吉をのちの元帥大山巖の後妻に迎えるべく尽力した。こうして、明治16年、益田の「御殿山の家」で、大山巖と山川捨松の見合いが実現している。この時、西郷従道、穂積陳重らも同席しているが、いずれも大山と益田の共通の知人であったのだろう。

また、松方正義、桂太郎など有力政治家との関係が、『自叙益田孝翁伝』に淡々と語られているが、山県有朋の場合と同じように、益田は商人の分をわきまえて、一定の節度をもって彼等に接していたと思われる。

一方、大倉喜八郎は、その「第一次洋行」の時、岩倉具視、木戸孝允、伊藤博文らの面識を得たことは既に触れた通りである。また、伊藤博文の要請によって領有直後の台湾を訪問した経緯が、『鶴翁余影』に記されている。そして、『大倉鶴翁傳』には、喜八郎に宛てられた「伊藤博文公書翰」、「伊藤博文公の漢詩と俳句」、「山縣有朋公の和歌」などの写真が掲載されているが、有力政治家との交流の一面をうかがわせている。

ところで、日露戦争当時の陸軍大臣は、寺内正毅中将である（明治39年に陸軍大将に任じられている）。寺内は明治35年（1902）に陸相に就任し、明治44年（1911）に辞任するまで9年半の長期にわたって陸軍大臣の職にあった。

朝鮮総督、首相を歴任し、元帥の称号を授けられた伯爵寺内正毅と高田慎蔵の関係は、あとで触れるように種々取沙汰されているが、山本四郎編『寺内正毅日記－1990～1916』（京都女子大学 昭和55年）の日露戦争当時の記事には、頻繁に高田慎蔵が登場する。益田孝、大倉喜八郎も『寺内日記』に再三登場するが、高田慎蔵の名前は、民間人のなかでは群を抜いて頻出している。この辺の詳細については、拙稿「明治・大正期の代表的機械商社高田商会（上）」（『白鷗大学論集』第9巻第2号1995年）所収の「陸軍大臣子爵寺内正毅」に譲りたい。

明治41年7月、陸軍大臣子爵寺内正毅宛に三井物産合名会社、合名会社大倉組及び高田商会の3社連名で、泰平組合結成の「御願」が提出されている。泰平組合成立の目的は、陸軍省払下げの兵器輸出である。この泰平組合についてはのちに詳しく触れることになるが、その構成員である三井物産、大倉組、高田商会がいずれも陸軍の最高実力者と密接な関係にあることは、なにかと疑惑の対象となっていた。

大正4年（1915年）12月26日及び27日の衆議院予算委員会では、野党である政友会側から泰平組合に関する質問が出されている。その前年の「シメ

「シメンス・ヴィッカース事件」では、議会において海軍が追求されてのに対して今回は陸軍が質問を受けることになった。しかしながら、その論鋒は、シメンス事件における野党側からの攻撃に比べると生彩を欠いている。その前年（大正3年）8月、我国はドイツに宣戦を布告しており、欧州諸国への兵器輸出が増大していたが、衆議院における野党の質問もこうした状況に基づくものである。

同年12月27日付大阪毎日新聞朝刊及び夕刊には、泰平組合（当時の新聞では「太平組合」と表記されている）に関する衆議院予算委員会における質疑の模様が次のように報じられている。

先ず、三土忠造代議士は、海軍の場合、兵器が直接ロシアに売却されていることを指摘している。従って、陸軍も「太平組合」を仲介することなく、直接売却する意向はないのかと質問している。また朝鮮総督に就任していた頃の寺内陸相が上京の際には、高田慎蔵の別邸に宿泊している事実を同代議士は指摘している。泰平組合設立当時の陸軍大臣である寺内子爵と、高田商会との密接な関係を明らかにしようとするのが、上記の指摘である。

その翌日には、別の議員から「太平組合が外国に売り出す軍器の価格は一年間で一億円以上に達す。しかし政府が同組合に多額の口銭を与え居るは、何の必要に出てたるかを解するに苦しむ」と言った意見が述べられている。

更に、「陸軍省と太平組合との間に存する疑雲は厚く蔽われ居れり」と、西村丹治郎議員は指摘している。ところが、こうした質疑に対する岡陸相の答弁は明確さを欠き、要領を得ないものであった。年末も押し迫った時期に開催された予算委員会であったことにもよるが、折角の疑惑の指摘も不発に終わった感を免れない。前年の議会における「シメンス・ヴィッカース事件」弾劾の熱気とは、全くの様変わりである。

ところで、当時の新聞ではいずれも「太平組合」と表記されている。単なる誤記であろうか。あるいは、「泰平組合」という名称が公表されていなかったためだろうか。

（以下次号）